

第 2 回

はぎのまえ

いっぼんぎ

萩前・一本木遺跡

現地説明会



第3～6調査区全景（南西を望む）
（平成23年10月19日撮影）

平成23年11月19日
高松市教育委員会

萩前・一本木遺跡について

萩前・一本木遺跡では、これまでに第1～9調査区について調査を行っており、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝など、多くの遺構を検出しました。

竪穴建物では、^{かまど}竈のある建物を多く確認しています。竈は非常に残りがよく、県下でも良好な資料となるでしょう。また、非常に規模の大きな柱穴からなる掘立柱建物を検出しています。

遺物では、須恵器の^{つきみ}杯身・^{つきふた}杯蓋・^{つき}杯・^{たかつき}高杯・^{つぼ}壺・^{かめ}甕、^{ぼん}こね鉢、盤、土師器の壺・甕・杯・高杯、石器、玉類、鉄器などが出土しています。

今回の第9調査区の調査成果から、萩前・一本木遺跡の古墳時代の集落の西端がわかり、萩前・一本木遺跡の様相が次第に明らかになってきています。また、古代の大溝が確認できたことから、この時期に遺跡周辺で大規模な土木工事が行われていたことがわかりました。

今回の現地説明会では、第8・9調査区について、調査結果を公開させていただきます。



図1 調査区配置図



写真1 第5調査区 竪穴建物1

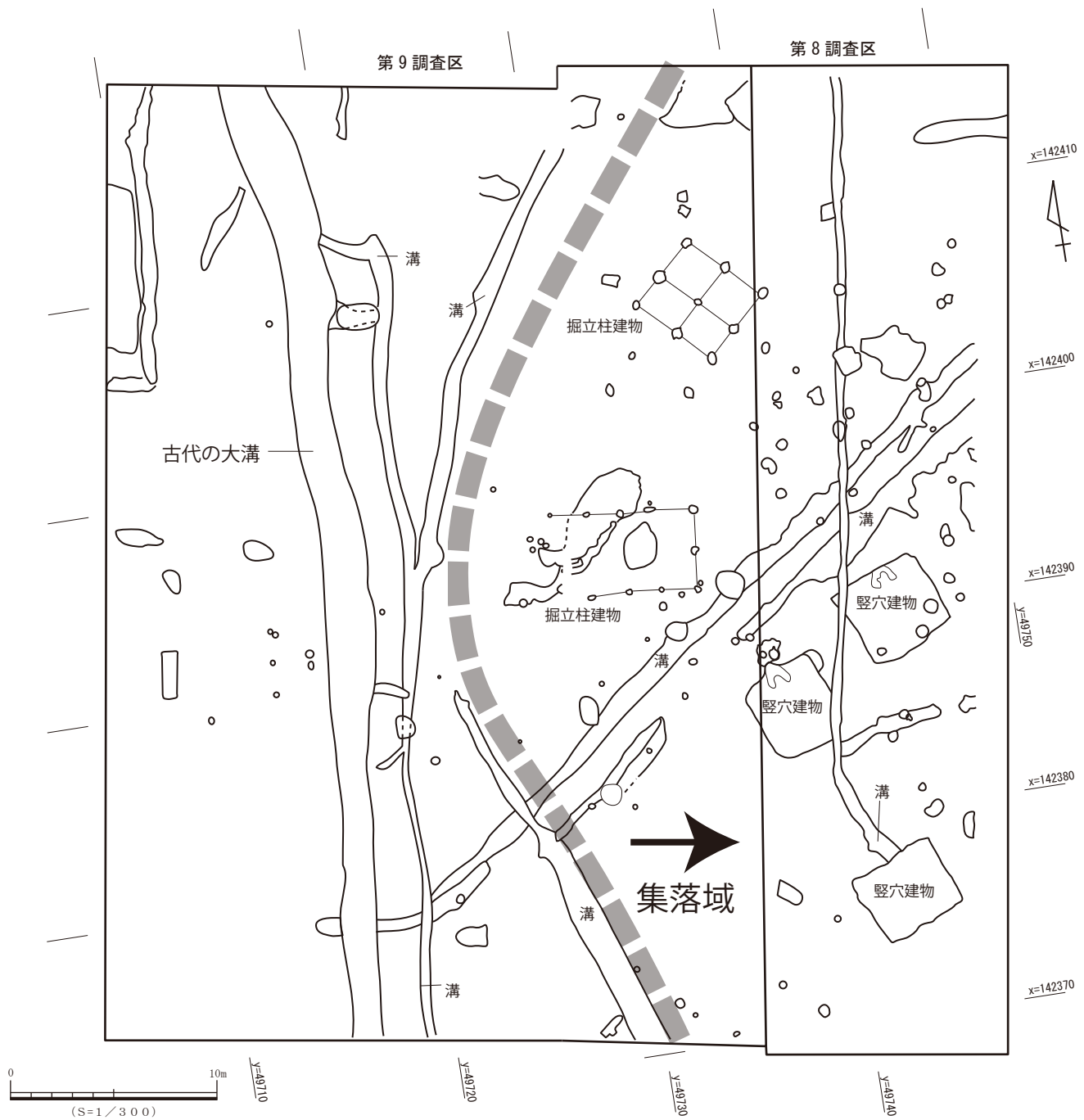


図2 第8・9調査区遺構配置図



5調査区 竪穴建物 1



写真2 第5調査区 竪穴建物 3 竈



写真3 第3調査区 竪穴建物 45 竈

調査成果

第8・9調査区では、竪穴建物3棟、掘立柱建物2棟を確認したほか、溝を複数条検出しました。

竪穴建物は、正方形の建物で、一辺が約3.6m、面積が約13.0㎡、長方形の建物で、長辺約4.0m、短辺約3.6m、面積が約14.4㎡です。

竪穴建物には、北側に炊事用の竈を造り、建物内に入ってくる雨水を逃がすために、板材などを並べて壁の保護施設としていた溝が掘られています。出土遺物の年代から、古墳時代後期（6世紀後半～7世紀初頭）の竪穴建物と考えられます。

掘立柱建物は、倉庫と考えられる2間×2間の総柱建物と、2間×4間の側柱建物を検出しました。このうち総柱建物は、竪穴建物の向きと同じ方位を向いていることから、同時期の建物と考えられます。^{かわばしら}側柱建物は、柱穴の埋土が他の遺構と違うことから、新しい時期の建物と考えられます。

溝は第8・9調査区ではたくさん検出しましたが、このうち第9調査区西側で幅約1.5～3.0m、深さ約1.0～1.5mの大溝を検出しました。溝の下層は黒色粘土で埋没していましたが、上層～中層にかけて水の流れた痕跡を確認しました。この溝はこの周辺地域の基幹水路の可能性がります。下層から出土した遺物の年代から、飛鳥時代（7世紀中ごろ・古代山城屋嶋城が築かれた時期）の溝と考えられます。

今後も、萩前・一本木遺跡の発掘調査を実施していきます。調査が進むにつれて、萩前・一本木遺跡の集落の広がりや当時の生活状況が解明され、この地域の歴史に新たな1ページを刻むことでしょう。今後の調査成果に御期待ください。

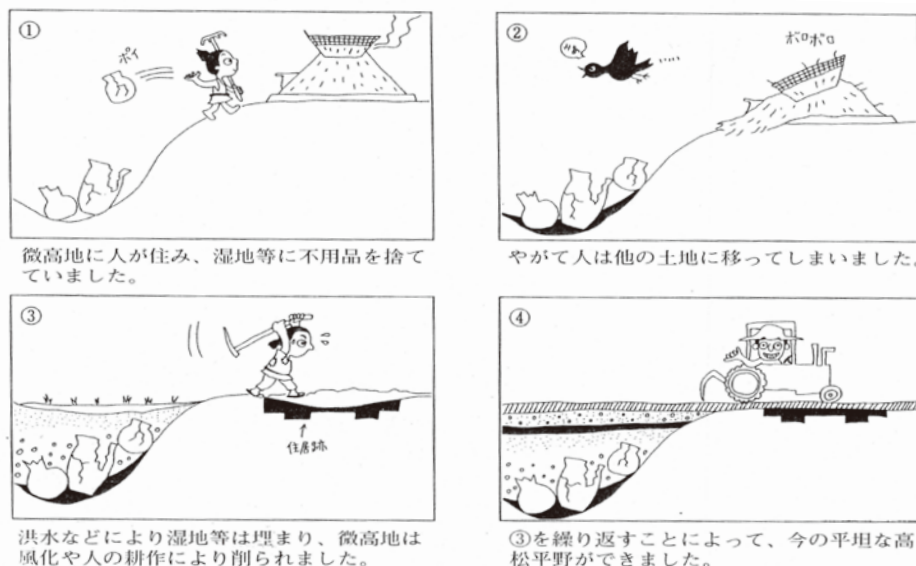


図3 遺跡ができるまで（『むかしの高松』第2号より）